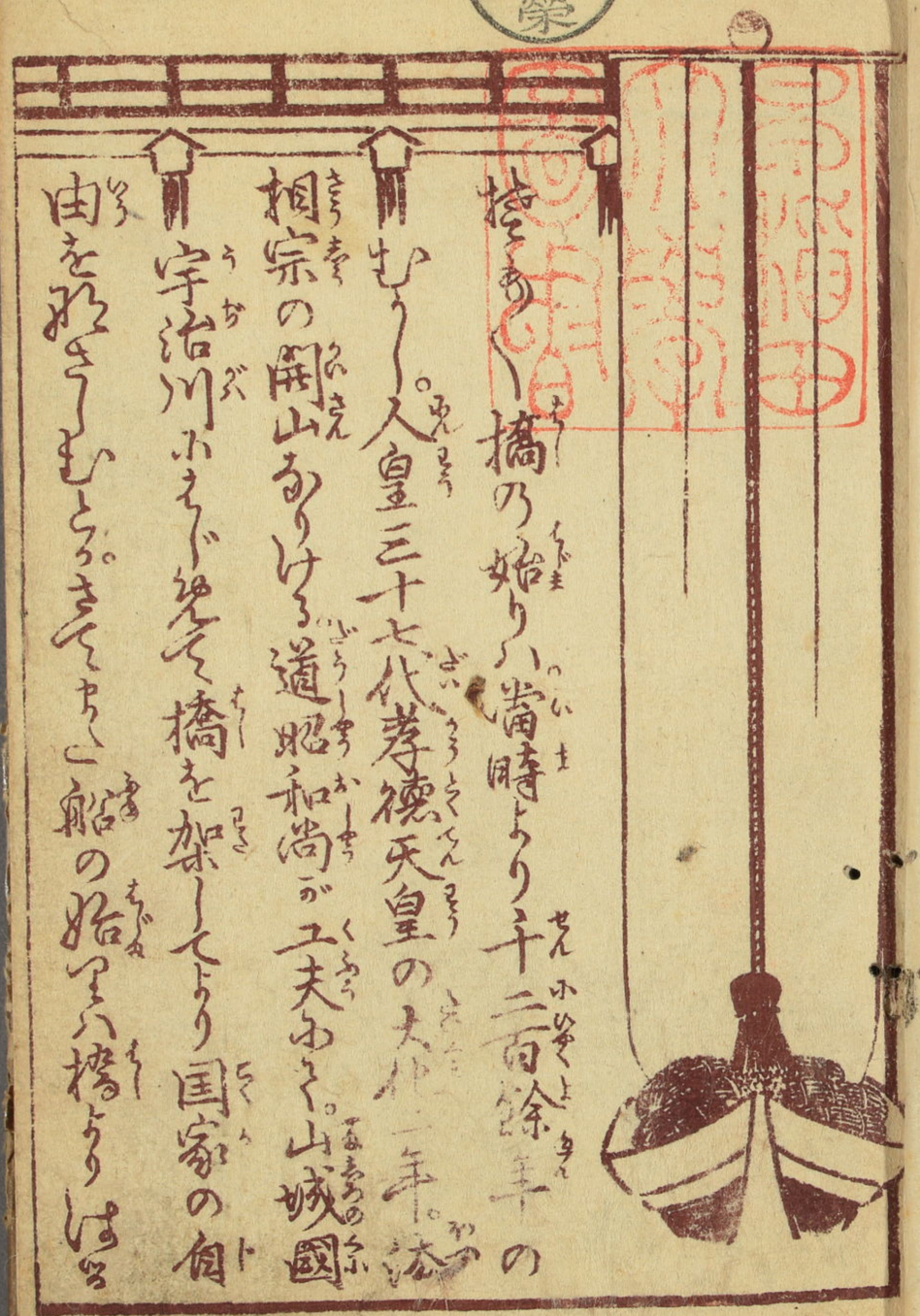
春色英對暖語

へ 13
3225
1-

奈良儀榮



按あくに橋の始りハ當時より千二百餘年の
むかし。人皇三十七代孝德天皇の大化一年。法
相宗の開山なりける道昭和尚が工夫にて。山城國
宇治川にはじめて橋を架してより国家の自
由をなさしむとぞ。さてまた船の始りハ橋よりはな

門へ 13
號 3225
巻 1

昭和十年七月四日 購求

この事以前にて。人皇十代崇神天皇の五年
七月諸國に勅して造らせらる。さまども其製
くはしからず。十六代の帝應神天皇の五年。伊
豆國にて造り出せしが。國用の益多かりしとぞ。其後
そじめて造りしは。日金山の楠にて長サ十丈余所
にしらへたり。こゝらやもの御船の綱を繩。など引
とあぬ別きなるゝん」とは。隆清朝臣の意乃哥。
松をかざりし家根船とは。續き唱唄の文句を事。

送り迎の辰巳船。魔利支天河岸走らする。
猪の牙乃船は其むかし。明暦萬治の年間
ヤ。押送りの長吉といふ者が。舟を業研の
こゝちに作り。魚荷を積ぐ押来るに。矣より
も早き風情を見て。三谷舟の船長が倩と
考へ付通ひ路急ぐ川船に。ことに伐法をりて
乗中さば。誰さんぞしにもよ詩とびなんと。
家職に念入両國の。笹屋利兵衛といふ人と。

浅艸御門の外河岸なる。玉屋勘五兵衛
といふ人が造らせ初てハ客を乘。元押送りの
長吉舟より。思ひ付る小舟なきバ。長吉船
といふべき线略しこゝちよきと呼ならハし。今又
猪牙と文字に書ハ。小船の形ちが猪乃
牙に似てあるからのこゞつけなりなるべし
諸君子御賞んじの事を再度古事つ
けて。枝川の名も語くに不知。素人服艚乃

狂訓亭。祭切と汐の落をとる。作意をな
ゝ思ひをよろ和ど。訓深の河岸へ持相
付。毎度迎合大桟橋。新嬢にゆらで新
著の數々。彫て呉ろと八方から。口がかゝりて
居にもかまハぬ。歩行を貫つて魁し。大嵜
屋りしと志ゝ以ふ

江戸
人情本一流の元祖
狂訓亭　為永春水誌

梅暦再開
暖語拾遺

春色梅美婦祢

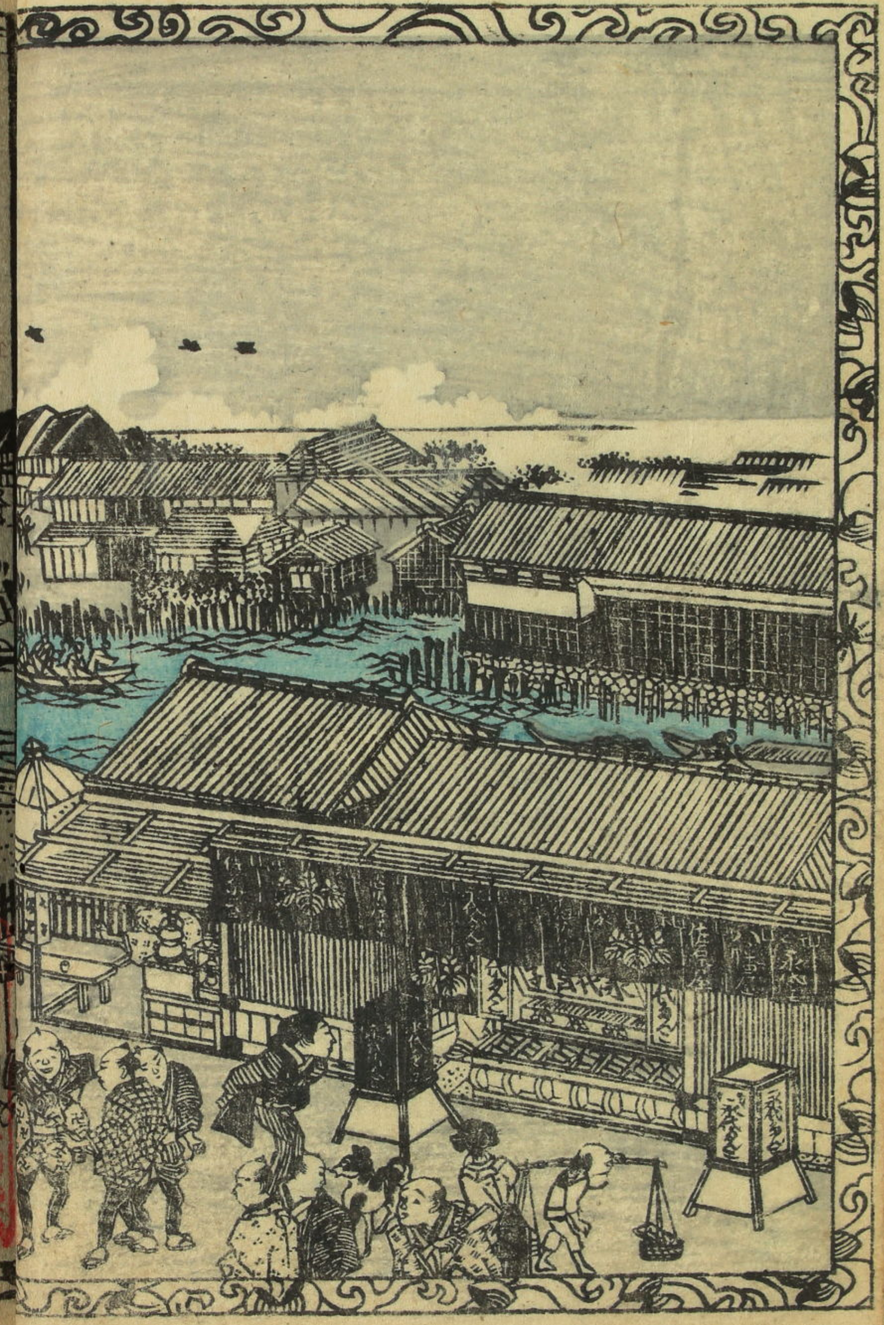
春水作

粋な杉田の梅見舩乗と唄女ハおなじこの
彼米八をいつまでも若ゆがしたが妻げしき
仇も恨こもれまゝる沖のかもめ浦千鳥
立君も同じ婀娜吉がさそひ合せし女連いづまも
色に堅法華あの川端の祖師さんへ日ふ千遍の法題目
唱へくしと外題の新版めぐるの花の香ゆかしくも偽へて
再三の法言覧を願ふものと

霞むれの
夕映見ふを
揺の人

秋光庵

永代橋邊
永代詠
更無一事
掛心頭
日夜清見
海上舩
可樂美人
笑語聲



玉の笄さゝる月彩もたぐらふ鬼ゟ雲の袖羅縷の袂
弓手も多く見眉も多き流行子そもくたてしなき
續小唄を
永代だしをも
永しく
せずそもく萩江の長唄ハ長く傳へて
仲中之町の名譽といふ色く北方の佳人を

金爐香爐
漏聲殘
剪剪輕風
陣陣寒
春色惱人
眠不得
月移花影
上欄干
春夜作
王安石

姉を以て始めかんぎへ
辰巳の
婀娜を
娣を以て
賢貞あまたば娣に班婕妤が
才が備ふ正に是一對の英とつゝべし

春色英對暖語巻之七

梅むよこ拾遺別傳

江戸　爲永春水著

第十三章

再説岑次郎ハ思ひがけなきまゝ西へお房母子に官事ゆゑ紅楓と
倶に同章つて鞆てまゝ発をとりもつくろひ紅氣なき体にハ看せ
なまじども紅楓を呉へ思ひせ来たる由来ハ配いかん方もなく継
程に今頼てかしも早く帰しくゝ西へお房の父正庵の許へ
紅楓の勤め居たる屋敷より使にても往たるかお房の母に唯今

急に帰宅いたしべし勿論路を急ぐにお房の踊の衣裳とひ足
も歪きものゆゑ岑次郎の宅へ止宿て黄ひ母のこと帰つて来る様
にとの急使を越しければ母の驚きお房の悦び岑次郎の曲或密に
子関紅根が迷惑四人の心種々思て狂訓亭の筆にも読かがたし
母はとるものもとりあへずお房を随しまくそこくに帰つて見し由来
お房は始にいもくと嫌しまがらも和かしく云よるあれも何からと
綱草を吸付さしいだし　「ハイトいひまがら岑次郎の虫を倩と見
て居る岑次郎はこまゆとして呑まがらも紅根が透見をしてハ

居るかと後へ気がねをするだりか今夜の始末を何をして
姉伐頼を合せぬ様にすらへべきかと狗をいたわて去て
お三ハ様例より陳子越に　三「お風呂が涌ましたから淫様ぞ入湯
ませんか　岑「ヲイく芳お房さん予風呂へお這入り左様あること
汗がまさく涼しくなるヨ　ふさ「ハイあたがたふアア是者お先へ入
まし私はお後ぐよろしふござるや　岑「ナラく予お茶おまゐり私ハ
今仕かけた用があるからそまをしく仕ゆけて這入るからまゐる
先へ予這入れくそしてゆるゆるとお三に洗ひお黄ひ　「ハイあ

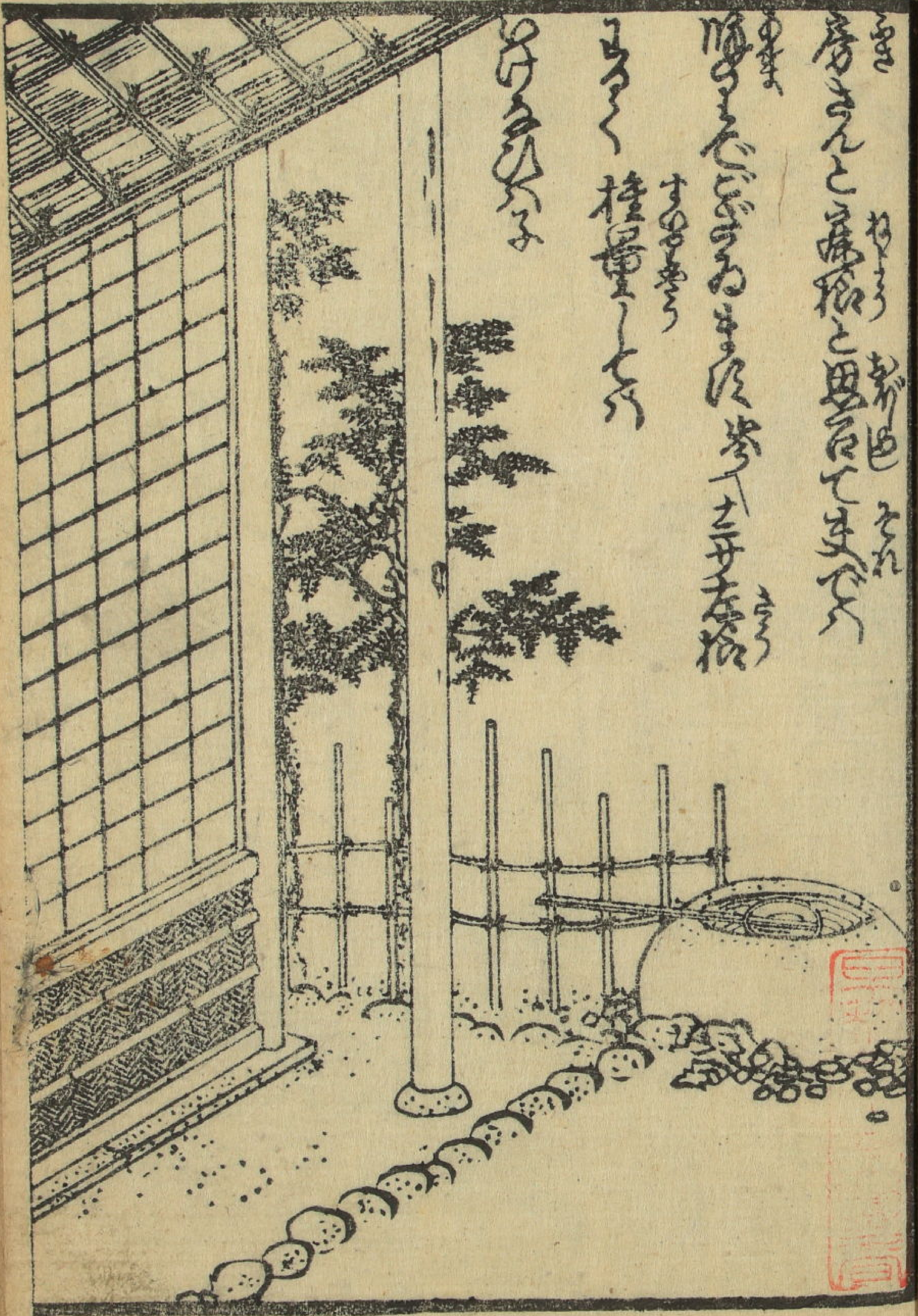
がこゝみ十二モウ洗ひましてもどのぐ亭麗ゆハ多くしませんヨ 岑「どの
あくしくそのうへに美麗なるまでくくなるものゝそまことに世界の男
ハ不義見惚て死んで仕まいアノ 「ヲ志ゝゝ私が化物でハござゐます
まひしまた根にこうく話ごとと強ござゐます 岑「ナニ〳〵こうくいへ
のでハござゐません実ハ此ハ屋敷の姉さんもお茶まいらるハ多ひ
「何根のこしく私が姉さんにかるひ申候ものゝそれごから半長ハ
姉さんをかひがつくお生なさゐます 岑「ナニ私しやア紅梅さんの
根なお屋敷ものハ寛に係ひサ 「イエそまでも半長ハ人間のい

のがお好ごとゆとてごから 岑「そまた根なつゐるひるをのゝ候とも
早く湯へおとゐつきヨ三が待てゐるごらうから 「ハイ〳〵寛に
私をバ邪ノ所なきゐます候ねへト笑ひながらいやこのひつく長椅に
浴衣の次女ゆくお房ハ風呂場へ立て行岑次郎ハ奥のうへ
行んとしてる次のゐに待まふけてる紅梅が温飲すがり付て晦
そふよ 「半長ハ下お悔らしいねへそまでござゐます候から昭夜
私が老ても 岑「コレサ〳〵また根なる最新をのゝ候ともアノアノとなれ座
後へでもお出ヨ何かの相談をするから 「十二氏所でも宜しふござゐ

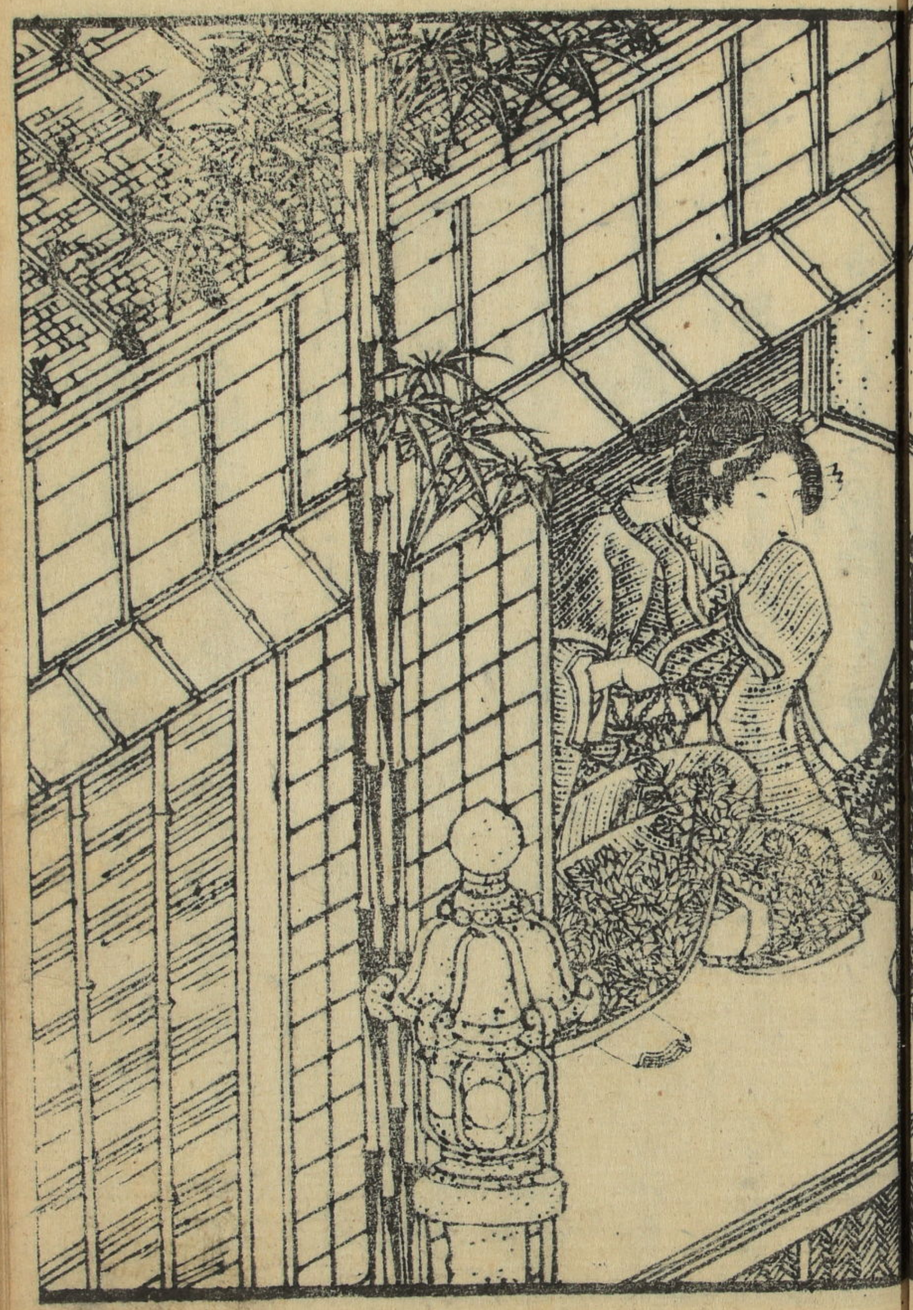
まゐる根は姉をとりがらずとも能ぢやアどざるゐませんか 岑 十二サ
とりぶるのでハなひがお前の居ることが知れてハ私が母がきんへ對して
海ぶそしくおかるも用があるからアル方へお出とのへバコりのまハ
云なひヨ何もかもお前のてゐぶ式子ト安理に手紙とり引連て小姫
の方より座中旅をさらせまゐ身ハ掾がハの上草履をはゐて生
垣を誠に案ぢしまへ連てまゐり母屋の方から見ゆる向の濤子を
メきり葉山の方ハ明く風をうける根にあらしく安理 岑 十三
子今夜の雨を何根せうねへ 十二 私もアお房に逢ませうヨト

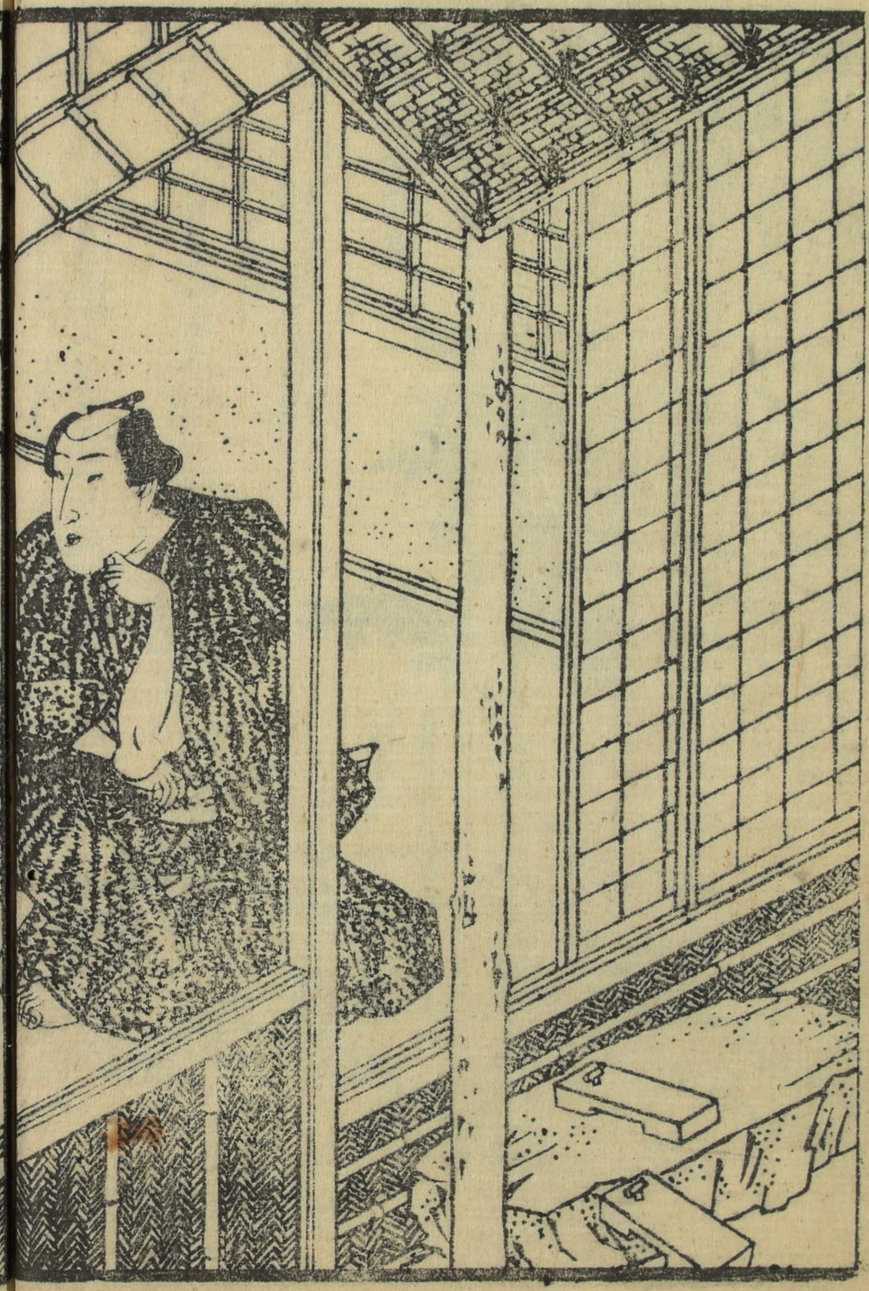
穫を立て葉乳で居る 岑 アレサ左根安理をひかものでハねへ主
信ならバ此根に乳をもらハあるひハ子 そまでも今私が
隠れて見て居りましてらバ寛にきゐくかハいらしゐ身をしく
お房におやうでんを云ひて例へ引寄て御主様バしぐらやアどざる
ませんかとまぐらら私が隠れて居るとお房も半長へ秋の所返す
をお教ひまゐハ居ませんものヲ 岑 十三 そらやア彼娘がくらしく何と
云てまゐバといひて宮部しく御前とあらく云かハしこ上ハ主根を浮
落きなさるしぢやアなひハ子今ゐも御屋敷から人が来るから正居

ぎんの方から何とかして来るてまゐるひでも始終懐しとげられ
まる理でもなひから是非お前と私の男の覚悟をしく居るゑ
なまじかうなる中で嫉妬などころでもあるまひ八子「是で八何様
なさし中せう 峯「ま二何様とおくかにゝ始方がなひから今夜ゟ
お前一人がくらの座敷に寝てゐておくれ「モウちつと是で居ル八工
峯「エ私しやアモウお房さんをよく寝かしてそれから夜中に起きて
様に座敷へ来ル八子めしも独ぐ気味がわるくて八私が来る
まで お三年ほどしてゐる「イエサア左様して置いてまゐりましたら八お



房さんと寝様と思召で来ても夫で
随分そこでぶつぶつ言ふまじ 峯「大事の茶様
なるべく推量して下され
けふ八子





「そまでも生君お房さんが小児でハ生まれし疾うし付く
お事んなきらぬと独でハござるゆせんか左様おつしやるから私が
乳にかゝりゆゝ中ハ子 考「とまハ志てう左様おつしく関からコリ
いハナ只私が用のある風情をしてお房さんを先へ疾つしく
夫から来るといふのごハ子あの嬢の目を覚しく居る中に私が
居なくなると不思義に思ふごらふからそれぞ左様云のごうな
らぬあしく思ひちやアコるひヨそしてまア脇腹のおまひにあれ
ねど泣くなしてから何様しく他社が知るものうちにく考へて

小児なせへトいひながら所向紅楓の寝へ来ていかけくちよりと作
向せ 考「此様な美しひものに思ひまして居てまた他に何の頼ひが
あるものか 「誠に生君ハ小児をなぶる様なことを共経てゝ
うしてお寝なさるゆゝ私ハモウトいひかけて後ハ母うく年にて
「思ひ切ふとぞんじこのに生君が安理に 考「五十二喧ぶろうり私が
痛恨てお前の方へ逃げく行こうお前が持て私の方へお出のう知
まるひが何でも子両方の魂が自然に側へ寄このごハ子まだかれども
目が覚うと私が急に追ふとあらうおまへがあつうやと押へて

ありやうに場見先生のお宅で今日は萬葉集のお講釈がある
からとまことそおしの事でも何度から往なひけまバならぬ 「ヲヤ
そまでハお産婆ゆハお房さんだろうけれ私だろうの所へ何ぞ
とよひ人でも来つたらバ何様いたしませうねへ 岑「十二誰が来る
ものか子やうに何が来たことのつくまき時にやア私が出るハナ 「ヲヤ
岑君ハ他所へお出様ばとでハどざるませんかまお留守へ萬一
お屋敷から人でも 岑「ナアニサお房さんの様をバ今の様に暗を
法ゐて来戸を出て漏まて庭の開戸から此所へ来て居るなり

六ヘエそまでもあの嬢が發明ぶろう気が付くとへ来ると大変で
どざるゆへ 岑「そやうやア仕様があやうやれ私が内に居るひと田
甫の方から悪漢が来てゐるゆへから表産婆の方でお様びと
お房さんとバ入口の方のるでお三と様ばしておゐて庭の西戸
の方から此所へ来る中来戸も何も大く仕まつてそして私が此
所へ来て居れバ却まやア仕るひヨ 「ヲヤ夏ぐござるゆへ
のにまた様に立籠て 岑「ナニサ此所へ此侵でメハ仕るひから此様に
涼しい風がまゐるから何様なるをしても汗も出ハ仕るひヨ候

甚不道の奴なり強るに他人にも情深き者にやまく旁ゆるを
あれはて田地を一畝ばかり與ふとまたよりて旁ゆるハ蠶を穀
の種を才に求めけれバ他人の思ひくをおそれて茶の種と蠶
を兄に与へたまどもひそうに蒸して後しこれバ米も蠶も益
に立べき理なしあるに旁ゆるハとまを知らず時節を待てる
に波蒸してよみへらまてる蠶の中よりなる由あり一蠶が生じて
大きさ牛の如し才ハとれを嫌ぐひそうに兄の蠶を数て奇妙
かな是より百里四方の蠶飛ぶまく旁ゆるの家に集るおもひ

めぐらに数さまし蠶ハ其王みてもあるならんといふ此節四
鄰の人々あつまやまく繰旁ゆるにハかしも気づされど旁
ゆるまた人々にもあらそらづさく稲も呉一莖を生じしてるが
その稲も他に異やまく穂の長さ二尺降り茶の実正しとを
おびたゞしとにおゐく旁ゆるハ此種をとりまく来年蒔き
おろしたらバさぞ能米を得るならんと思ひ考へうの稲は
寄やそ居たる所に忽ち烏一羽来りまく稲穂を喰ひ
銜へて山の方へ飛行を旁ゆるハいろまく烏を逐ながら五

六里だろう山に上るとしが烏ハ山中にて追迫られ岩石の鋒に
うくまに入て出ざれバ旁立ハ忙然とすむ中に日も暮経も
黒らねバ烏の迹入りし石の側に体足しく居たりしが秋
半に月の出て明なる時におよびて赤衣を着たる小児石の
蔭より飛れけまバ何所ともなく気勢の小児出来りて戯
まれバ彼赤衣の小児なるに金槌を以て集りし小児に向ひ
汝に怪むものあらバ我に預へ尋ものの紙与へんとのへあらに
おゐて多くの小児各そのものむ所の所に酒肴饌まて[illegible]

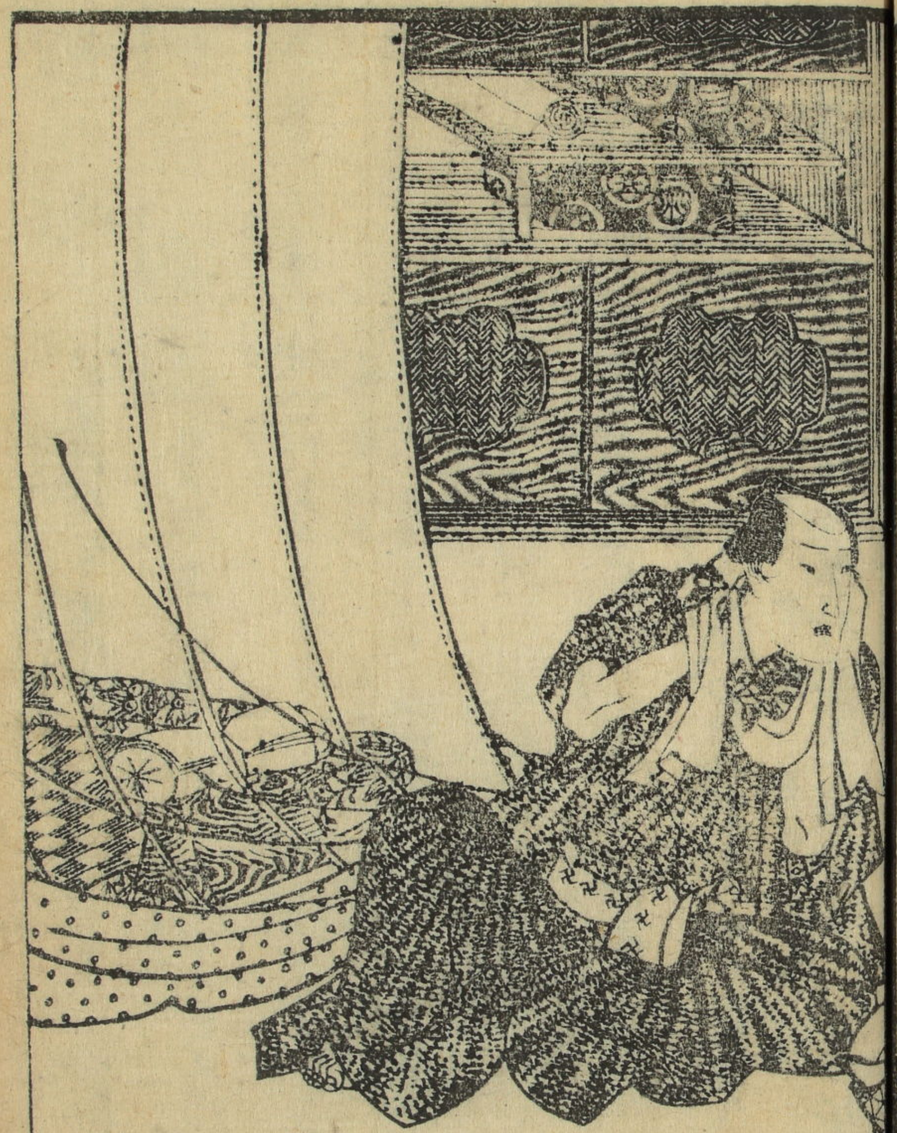
なんどいふに預へバ今の小児ハ赤衣の神をふりて上金槌にて地を
撃まねをすれバ他の小児の飛びし衣含ことごとく備ひ元皆去
怪ぐこまを食しまるハ若うざつも久しく怪びて立去赤衣の小児
ハ金槌を石の鏈に挿まて消去ける旁色ハ以始終を見て大きに
喜び知そうに金槌を去て家へ立帰り試ふに金槌を撃振バ
金銀財宝の欲る侶に打出しなれバ如ち新羅國第一の福
人となり身ハ次第に貧乏人となり兄を羨み畑に居たる烏を
追かけて山中にいたりしが兄の悔に関し石の側にいたれバおそ

ろしき鬼どもあらはれて弟を捕へ金槌を竊し者なりとて
ひどき目に合せ山を追下しけるがそれより怪物のごとき事なり
聚人に笑はれて死しけるとぞ彼旁立が西虫なるにより金槌
を自然とさづかり弟は兄を嫁し兼男にしたる咎にてかく
のごとし此金槌のるのを撃出の小槌とは号しとりや虚実は
知らねど兄弟などうなりけるに兼来にすることなかれ兄を
殺ひ弟は嫁し西虫に身は惜しまバ打出の小槌に小さ
幸ひも自然さづかるものと知らべし　あき「ヨやく　おもしろへるを

書て本ぐござるまほ至ことは岑さんお姉さんがお着なし
つこのでござるまほうへ　岑「エ　そのかん本かへそやかや私が持たの出
物の中から稜出して所ると文章を俗に楽しく小児のなぐさ
こふき母様と思ってとしらべて本サまた打出の小槌の咄しハ子周
陽後集といふ書の中にあるまたなしサ　あき「左様ぐござるか
すう私も是から姉上さんを兼来に仕事はすゐねへ　岑「アく
左様サ姉さんもおに心も和合おしゐそまぐなひと貴一とこが
とあるから　あき「ヨやまぐござるまほ姉さんとお姉さんと私と

同宅に居ハ仕まひし　なぜ私と姉よさんと間がいるひとお茶さんが
おこなりなさるまほねへ　岑「そまぐろても見ろう後何れ人
とさぐ三個同所に居まひものでもなひヨ　「何様して姉
さんとハ同居にお生なさるぐらいけまども私ハお茶さんの側に
居ることハ業ゆせんヨ　岑「ヨヤそまでもお茶昨日の夜に以て
一所に居ることを出くおよとしでハなひか　「そト申し
顔を赤くしゝ　「ヨヤくあまハモウ此以茶他人に顔んごのぐ
ざるゆほが昨日お茶さんの所へとぐきすしを宅に帰らしのあ

岑「ヨヤそまぐちやゆ夜をおよとしの節と今とハ私が変つくお生
のうへ　「イエ左様でハどざるませんが　岑「たゞ居に為ると
のうよ　「イエ昏になりゆほくらゐなるゝバ思ひ切つくお私
うしい夜がよくまほものでどざるませうゝトのひ急ぐ繪
草紙を開こう琴くんぐらしく居るまま姿岑次郎が仙ハ
姉の紅楓とくらべて楽しみに評しく見れバ姉ハ紅楓の時
雨に立付しながめお房ハ雪中の梅の南枝に蒼がかどろ
びしどぞく仙まもおもひきうハやそて詠めハうらぐ浦も我を



慕へが嬉しくて義理も世間も知らずなぐら不覚ひさづかな
心となり紅楓の前をたぐうつとなぐらも重情にぞうつりける
さまざま日中は他へ行ふりをしてお房の側になぐくも居ぜ
ひそうにたなれ産義へ立つたく紅楓の仙をなぐさめしが起き
その日もたや蒿く夜食はお房と産を同じふし日中は
他へ往しおもむきにせし由来お三がたうらひにて紅楓と雑交
籠ゆく食るをなし雲仙妃いかん方もなくせうくと初夜
になりし由来蚊帳を為せ卧具を調へた　岑「サアお房さん

夜が短うひうう今夜は早くお寝ヨ今朝毎日さんが明日は来
連中と何所のうお屋敷へ往んだやアなひうへ　きへ「アヽ左様でござ
ゐすれヨそまだやア早くお邪ノにならひ様に卧ませう
トかしすねくいへ　岑「ヨや誰もお前を邪ノにするものかな
きへ「イヽエそまでもお前さんがまたこ広風さゐとう何とうへお出
なさるうらそれぞ早く寝ろと先後ンでござゐすれヨ「十二く
何様してモウ〳〵今夜は何所へも往はしなひのサ　きへ「嘘だち
うりそれだやア私の寝る側に居て下さいましそれはお客でご

ざるませう　岑「よく種ンなるすをこゝろくいじめるのハ　「十二
左右でハござるませんが独ぐ阿るのハ何ぞう気味がしるふど
ざるすれものヲ　岑「ドレ〳〵手右なるバ側へ痛てやこ化もの
だなしでも仕様ゝ子　「あんとふぐござるすれ人痛ひねへ
岑「まこ神ぐ焼火を消してハいけなひヨ　「ヲ示こゝ数性の
中ニハ焼火ハござるすせんものヲ　岑「左右なぐ出し何ぞ
こゝハ出ニ考へくおぐらしてよふ　「アレおぐらしてハ酉で
ござるすれ後ヨ落こうきなひぐおすなしなさるヨ　岑「それぐろて

化物だなしのこゝくなひのハ面白くもなんともなひハナトいく
なぐら数く二人ハ扱性よ入り浮世の雑談化物のたなしに
時刻をうろせどもお房ハきらに寝もせられたや寅ノ刻の
鐘コウ〳〵引　岑「ヲやく〳〵アレ宛寅ノ刻がなる早くお寝ヨ
おゐらもモウ〳〵今のさなしで大そふに労れたから一ト寝入
仕なひなまバならなひ　「ヲ示こゝ喧ぐらうり身に志こそ仕
志くお聞せでもなくゆく私がそまつらくとやてもなかか寝
入くお出ぐらうしなひにハ何ぞうこゝらなひとなをお言ご物ヲ

岑「古稲かそつやゝものく言ひ節もあるこのサ
むくあるくあるねへのを我慢をしてものを言ひ居さうら
おしハ言葉のこうらねへことも為てさらふ八字「おかしいねへ
ト岑次郎の鳥を姓しそふに看て完爾笑ふ 岑「サアくモウ
能加減にして寝るといへバ情のことのみごのう「それでも
私が寝るとお茶さんがまた居留さるへ往きまひごね
ヲ 岑「ナニつあらるひ夜半に何所へ行ものチ「イエそれ
でもお茶さんのお出るさる居留さるの別家にハ美しひかのら

あいお小性の稲な娘子がお主でごからそまでぐお茶さんが目中から
往きぐづくぐだらうお主なさゐましたハトのハまてくびりくつて
岑次郎 岑「エ何をいへのご子 「ヲ来ましたノウ 目中子風呂
うら上つてやしこ節子お茶さんが何所へかお出なすらく私一人
で沸寝をいたしたらお風呂の姉上さんの稲な娘とお茶さん
と此しを志く私ゐ入のを美に見ましたのサ ドレく宮寝
ませう万一意地のこるひことをしく白貧の内本の稲に兄
さんのだちの歯るとこるへどごらゐ中に ねへト笑ひながら脊

親跡の蒲をくゝ右の跡をあるして送ったまつぐその出来の功拙を撰みてかまくらぐ追加の板行とまたものなり

門人

狂言亭爲永金賀補

狂花亭爲永春蝶校

春色英對暖語巻之七了